

第 29 回全国小学生作文コンクール

「わたしたちのまちのおまわりさん」

受賞名：日工組社会安全研究財団賞（高学年の部）

タイトル：お父さん伝わったよ

氏名：樋渡 歩夢（ヒワタシ アユム）

小学校名：鹿児島県 鹿児島市立喜入小学校 五年

「どけっ、じゃまなんだよ。」

テレビの画面の中で、男がさけんでいた。男は、黒い服を着ていて、学校のろう下で包丁をふり回し、そうさけんでいる。母に、

「テレビを付けてごらん。」

と言われ、何気無く見始めたニュースだったけれど、ぼくは、きょう怖と興味でテレビから目がはなせなくなった。

黒い服の男は、しばらく暴れた後、数人の先生にさすまたで地面に押しえつけられ、動けなくなった。その姿を見て、ぼくは、はっとした。

「え。これ、お父さんだよ。」

母は、にこにこしながら言った。

「そうだよ。お父さん、中学校で不しん者訓練をしたんだって。」

それを聞いて、ぼくのきょう怖は、一気にはずかしい気持ちに変わった。ぼくの父が、地面に押しえつけられている姿がかっこ悪かったからだ。ぼくの父は、けい察官だ。なのになぜ、悪い役をしないといけないんだ、と悲しくなった。ぼくは、もやもやした気持ちのまま、妹とふざけて、父がつかまる真似をして遊んだ。母は、しばらくぼく達が遊んでいるところを見ていた。そして、まじめな顔をして、聞いてきた。

「お父さんが、あんなに体を張ってまでみんなに伝えたかったことが何か、分かる。」

ぼくは、すぐにその質問には答えられなかった。

録画していた訓練のニュースをもう一度見ていると、先生たちに真剣な顔でさすまたの使い方を教えている父が映っていた。ぼくはまた、はっとした。ぼくは、今まで、けい察官の制服を着ている父が「かっこいい。」と思っていたけれど、今、黒い服の父も「かっこいい。」と感じたからだ。

父は、いつもはとてもやさしい。ふだんは、あんなに大きな声を出すことはないし、あんなに怖い顔をしたこともない。そんな父が、悪い役を全力で演じていた。そうすることで、中学生に身の守り方を教え、みんなを守りたいと思っていたのだと思う。だれかを守るために全力を出し切る父は、たとえ不しん者役でも、かっこいい。ぼくは、父の強い気持ちを感じた。

父の訓練によって、一人でも多くの人を助けることができれば、ぼくはうれしい。

その日、父は泊まりの仕事で家に帰ってこなかった。明日、父が帰ってきたら、ぼくはこう言いたい。

「お父さんの気持ち、伝わったよ。」